

胆沢平野開拓の基礎を築く

千田左馬・遠藤大学

後藤寿庵の用水堰開さく事業(土地を切り開き堰などを造ること)は、一六二三年(元和九)十二月、寿庵の逃亡によって中断される。

幕府がキリスト教を禁止し、取り締まりが強まる中、熱心なキリスト教信者だった寿庵は、工事をなかばにして、やむなく姿を消さなければならなかった。

中断されていた堰の開さくは、寿庵の意志を継いだ人々によって続行された。その代表的な先人が、関村(現在の前沢区)の千田左馬と前沢本杉(現在の前沢区)の遠藤大学であった。

千田左馬はキリスト教信者で、後藤寿庵に心服(心から従うこと)していたらしく、堰開さく後と思われるが、名を「寿清」と改めている。左馬の息子の勝則(丹後)は、父の工事を助け、その後も工事を続けて、前沢村に至る堰を掘ったとされている。

当時の胆沢平野地域は、荒れた土地が多く、いつも水不足に悩まされていた。そのため、農民たちは、小さな沢沿いで不安定な稲作

を行わなければならなかった。

寿庵の去った翌年の一六二四年(寛永元)は、大かんばつであった。一帯の水田は白く乾いて地割れができ、土ぼこりが畑の作物を枯らしてしまおうという悲惨な状況であった。

村人は、成す術がなく、空を見上げて恵の雨を神仏に祈るしかなかった。しかし、連日の祈りにも、雨はいっこうに降る気配がなく、村人は困り果て、苦しい日々を過ごしていた。千田左馬は、こうした痛ましい状況を目のあたりにし、中断されていた堰の開さく工事を再開に立ち上がったのである。

左馬は、この地方の村々の領主であった石川大和(当時の仙台藩伊具郡角田の領主)に、自分の村と、ほかの七ヶ村に水を引くことを願い出た。一六二五年(寛永二)五月、石川大和から許可を得て、翌年から本格工事が再開された。

村人は、げんのう・つるはし・もっこなどを持参し、堰を掘るための作業小屋に集まった。人夫(土木工事などの力仕事を行う労働者)は、胆沢川取水口の再工事と水路掘りに分かれて急いで作業を進めた。予想をこえる数の人夫が工事に参加し、飯場(工事の現場付近に設けられた合宿所)の食料が底をつき、左馬は困り果ててしまふ。しかし、工事を中断するわけにはいかないため、青麦(刈り

取るにはまだ早い麦）を刈り取ってお粥にし、それを人夫の食事として工事を続けたと伝えられている。

左馬は水路となる土地の寄付をお願いしたり、堰の予定地の測量も行ったりした。今のような機械のない昔の測量は、夜、いくつかのちようちんを棒の先に掲げ、その灯で土地の高低を調べ、縄をはる方法で行われた。他にも、工事現場の見回りや人夫の激励など、多くの仕事に精力的に取り組んだ。

千田左馬と共に、後藤寿庵の意志を継いだのが遠藤大学である。大学もキリシタンであったと伝えられており、キリスト教信者に共通するように、その出自（出てきたもの所）などははっきりしていない。しかし、千田左馬の片腕となって堰の開さくに尽力（力を尽くすこと）した人物なので、現在までその名前が語り伝えられてきたのであろう。本杉、目呂木、大桜（いずれも現在の前沢区）の人たちは「大学様の田植の終わらないうちは、田植をしなかった」と言い伝えていることから、大学を敬っていた村人の様子をうかがい知ることができる。

いくつもの困難を乗り越えながら、堰は一六三一年（寛永八）に完成し「寿庵堰」と呼ばれるようになった。現在の胆沢区、前沢区に広がる水田開拓の基礎を築いた寿安堰は、完成から三百八十年近

くたった今も、この地域の生活を支え続けている。

寿安堰を完成させた千田左馬と遠藤大学の偉大な功績をたたえ、一九六六年（昭和四十一）十一月、お物見公園（前沢区）に、千田左馬、遠藤大学記念の碑が建てられた。

*参考文献

『胆沢平野土地改良区史』

『郷土の発展に尽くした胆沢・江刺の先人物語』

胆沢・江刺先人物語の会

『前沢町史中巻』

前沢町史編集委員会

『わたしたちの前沢』

小学校社会科副読本



千田左馬 遠藤大学 記念碑 (前沢区お物見公園)



現在の寿庵堰